

母親の育児ストレスを規定する要因に関する 日中韓蒙比較研究 — 母親の育児ストレスと成育歴、愛着、ソーシャルサポートとの関連 —

寺見陽子 (神戸松蔭女子学院大学)

【目的】

筆者らのこれまでの研究では、育児ストレス因子として育児充実感、育児拘束感、夫との不一致、育児当惑感が見いだされ、それらは、母親の親からの非受容的養育→母親の回避的な愛着→育児拘束感→育児拘束感という関連が見出された。それらの因子は、母親の親との良好な関係、母親の父親の存在感、夫の協力・育児参加、友人や専門機関・医療機関・地域支援活動のサポートに規定され、特に母親の親との良好な関係が、夫の協力や親・友人からの情報、地域活動の負担感と関連し、それが、育児拘束感、育児当惑感に影響を与えていた。本研究では、日本と同じ文化ルーツを持つ、韓国、中国、モンゴルと比較し、日本の母親の育児ストレスの特性を成育歴、愛着、ソーシャルサポートとの関連に注目して検討することを目的とした。

【方法】

対象：3歳以下の子どもを持つ母親（表1）。

表1 対象の年齢構成

年齢	日本	中国	韓国	モンゴル
20歳以下	0	0	0	1
21～25歳	1	4	0	32
26～30歳	32	47	4	31
31～35歳	82	40	29	21
36～40歳	45	7	49	8
41～45歳	5	0	24	2
46歳～	1	0	7	4
計	166	98	113	99

手続き：アンケート法。調査内容は、母親の属性（年齢、子ども数、家族数、就労）、育児に関する項目62項目、母親の親の養育に関する関係18項目、愛着に関する項目18項目（詫摩・戸田ら、1988）、育児サポート23項目。

【結果】

1. 因子分析結果：それぞれの国の因子の構造が異なったので、ここでは全体を因子分析した（重み付けなし最小2乗法・プロマックス回転）。その結果、育児では、第一因子は育児充実感、第二因子は育児当惑感、第三因子は育児拘束感、第四因子は仕事への逃避、第五因子は夫の育児参加の5因子、母親の親の養育態度では、第一因子は拒否的態度、第二因子は干渉的態度、第三因子は友達の態度の3因子、愛着では、第一因子は安定型、第二因子はアンビバレント型（以下アンビ型に略す）、第三因子は回避型の3因子、ソーシャルサポートでは、第一因子に夫、第二因子に親、第三因子に近所、第四因子に専門機関、第五因子に自立した関係の5因子が見

いだされた。国別の差異を見るために、重回帰分析と多重比較を行った。

2. 因子間差異：各因子における国間の差異を多重比較した結果、日本（以下日）の母親は、他国に比べ、育児充実感が高い、育児拘束感が低い、仕事への逃避が高かった。また、母親の親の養育態度は、日は干渉的態度において一番低く、愛着では、日は安定型と回避型の得点が高かった。

3. 母親の愛着との関連：育児充実感、日はアンビ型が負の影響、中では安定型が正の影響、韓では安定型が正の影響及びアンビ型が負の影響を与えていた。育児当惑感、いずれの国においてもアンビ型が正の影響を与えていた。育児拘束感、中・韓においてアンビ型が正の影響を与え、蒙では、愛着のすべてのスタイルが正の影響を与えていた。仕事への逃避では、日本は影響がなく、中では安定型が、韓ではアンビ型が、蒙ではアンビ型と回避型が正の影響を与えていた。

4. 母親の親の養育態度との関連：育児充実感については、日は関連がなく、中・韓・蒙では拒否的な養育態度が負の影響を与えていた。育児当惑感、日は影響がなく、韓・蒙は干渉的態度が正の影響を与えていた。また、育児拘束感では、韓において干渉的態度が正の影響を与えていた。仕事への逃避は、中では影響がなく、日・韓・蒙において干渉的態度が正の影響を与えていた。夫の参加では、日・中ともに影響がなく、韓・蒙で拒否的態度が負の影響を与えていた。

5. ソーシャルサポートとの関連：育児充実感では日・中・韓では夫の理解が、蒙では夫の理解と親の援助が正の影響を与えていた。育児当惑感、日・韓では夫の理解、中では親の援助が負の影響を与えていた。育児拘束感、日では夫の理解、中では親の援助、韓では夫の理解と親の援助が負の影響を与えていた。仕事への逃避は、日は夫の理解、中では近所が負の影響を与えていた。

【考察】

母親の育児ストレスは、他国に比べ、充実感があり、拘束感が低かった。愛着、親の養育態度、ソーシャルサポートとの関連については、蒙を除き、概ね同様の関連を示した。

謝辞：分析では神戸松蔭女子学院大学卒業生長谷川由木氏の協力を得た。